

博物館だより

2026

No.128

KOBE CITY MUSEUM



【特別展】
ゴールドマンコレクション
河鍋暁斎の世界

2026年7月11日(土)～9月23日(水・祝)

前期 7月11日(土)～8月16日(日)
後期 8月18日(火)～9月23日(水・祝)

※会期中、一部の作品は展示替えを行います。



地獄太夫と一休(部分)

河鍋暁斎筆
明治4～22年(1871-89)
絹本着彩 137.1×69.3cm
イスラエル・ゴールドマン・コレクション

©Photo: Ken Adlard

遊郭に乗り込んできた一休和尚の本性を試そうと、舞妓・歌妓でもてなす遊女の地獄太夫。一休が声高らかに足拍子で踊り歌うと、舞妓たちはことごとく骸骨の姿となります。この奇跡を見た地獄太夫は、一休への疑いを晴らし、自らの名前と、地獄図の襦袢に込めた願いを告白します。「地獄太夫と一休」は暁斎が繰り返し描いた主題ですが、本図では華麗で妖艶な女性美と、奇っ怪なユーモアセンスが炸裂しています。

展覧会スケジュール 2026.4 - 2026.9

2026年	4月 April	5月 May	6月 June	7月 July	8月 August	9月 September
特別展 23階	4/25(土) 【特別展】神戸百華—コレクションが開く神戸の魅力	6/14(日) 【特別展】ゴールドマン コレクション 河鍋暁斎の世界 前期:7月11日(土)～8月16日(日) 後期:8月18日(火)～9月23日(水・祝) ※会期中、一部の作品は展示替えを行います。	7/11(土)	8/23(日)	8/25(火)	9/23(水・祝)
	2/28(土) 【受贈記念特別展】ガラスとともに—一玻璃文庫名品展	4/5(日) 【特別展】秋岡図書—地理学者のコレクション—	4/25(土) 重要文化財 狩野内膳筆「南蛮屏風」 豊田秀吉ゆかりの絵師・狩野内膳による「南蛮屏風」は、近世初期の国際交易の華やかさを今に伝えています。この展示はその精巧な細部まで鑑賞できる貴重な機会となります。	6/14(日) 重要文化財 狩野内膳筆「南蛮屏風」 重要文化財 狩野内膳筆「南蛮屏風」左隻 桃山時代、16世紀末期～17世紀初期 池長孟コレクション	7/11(土) 江戸参府200年 シーボルト 出島のオランダ商館付医師として来日したシーボルト(1796-1866)。文政9年(1826)、商館長の江戸参府に随行し、長崎から江戸を往復しました。本展示ではシーボルトとその周辺の人々に関する作品資料をとり上げます。	8/23(日) 河鍋暁斎と幕末・明治の錦絵 河鍋暁斎(1831-89)は、幕末から明治にかけて活躍した絵師です。今回はバラエティに富む彼の作品から、鮮やかな多色摺り木版画「錦絵」に着目し、同時代に活躍した浮世絵師たちの作品とともにご紹介します。
コレクション展示 2階	4/25(土) 写された坤輿万国全図 万暦30年(1602)にイエズス会宣教師のマテオ・リッチが作成した世界地図は、日本にやってくると模写されて広がりました。地図のもつ美しさとともに、写す行為が繰り返される中で生じた「違い」にも着目してお楽しみください。	6/14(日) 重要文化財 狩野内膳筆「南蛮屏風」 重要文化財 狩野内膳筆「南蛮屏風」左隻 桃山時代、16世紀末期～17世紀初期 池長孟コレクション	7/11(土) 星の地図 天に浮かぶ星々の様子を描いたものを「星図」といいます。古くから人々は星に魅せられ、その輝きや動きになんらかの意味を見出そうと、夜空を観察し、描いてきました。この夏は博物館で星を見てみませんか?	8/23(日) 三好硝子製造所のガラス器 明治23年(1890)、大阪の西園寺町(現在の浪速区桜川)に三好鹿蔵によって創業された三好硝子製造所。同製造所のガラス製品には、卸問屋を担っていた野々村藤助の商標マークが付されているものが少なくありません。皿や湯飲み、哺乳瓶などのプレスガラスを中心に同製造所の活動を探ります。	8/25(火) 西洋古版図 ヨーロッパがみたアジア ヨーロッパで作られたアジアの地図をご紹介します。日本で作られた地図とは異なる色づかいやデザインをご覧ください。	9/23(水・祝)
	4/25(土) 重要文化財 狩野内膳筆「南蛮屏風」 豊田秀吉ゆかりの絵師・狩野内膳による「南蛮屏風」は、近世初期の国際交易の華やかさを今に伝えています。この展示はその精巧な細部まで鑑賞できる貴重な機会となります。	6/14(日) 重要文化財 狩野内膳筆「南蛮屏風」 重要文化財 狩野内膳筆「南蛮屏風」左隻 桃山時代、16世紀末期～17世紀初期 池長孟コレクション	7/11(土) 江戸参府200年 シーボルト 出島のオランダ商館付医師として来日したシーボルト(1796-1866)。文政9年(1826)、商館長の江戸参府に随行し、長崎から江戸を往復しました。本展示ではシーボルトとその周辺の人々に関する作品資料をとり上げます。	8/23(日) 河鍋暁斎と幕末・明治の錦絵 河鍋暁斎(1831-89)は、幕末から明治にかけて活躍した絵師です。今回はバラエティに富む彼の作品から、鮮やかな多色摺り木版画「錦絵」に着目し、同時代に活躍した浮世絵師たちの作品とともにご紹介します。	8/25(火) 西洋古版図 ヨーロッパがみたアジア ヨーロッパで作られたアジアの地図をご紹介します。日本で作られた地図とは異なる色づかいやデザインをご覧ください。	9/23(水・祝)
神戸の歴史展示 1階	4/25(土) 神戸の村と古文書Ⅲ 摂津国八郡郡花熊村 記録、証文、伝達などの目的で作成され、後世に伝わる絵図や文書。今回の展示では、花熊村(現神戸市中央区)に関わる近世の絵図と文書から、神戸に生きた人々の営為をたどります。	6/14(日) 重要文化財 狩野内膳筆「南蛮屏風」 重要文化財 狩野内膳筆「南蛮屏風」左隻 桃山時代、16世紀末期～17世紀初期 池長孟コレクション	7/11(土) 神戸で出会う、豊臣一族 天下人「太閤さん」として知られる豊田秀吉は、有馬温泉を愛するなど神戸ゆかりの人物でもあります。本展示では、秀吉やその家族、家臣の神戸での足跡をご紹介します。	8/23(日) 蒐集の世界～柳田義一コレクション～ 柳田義一は、奈良県法隆寺の瓦に強く魅せられ、古瓦等の蒐集を始めました。瓦は、大陸文化との交流の中で、飛鳥時代に日本列島へ伝来したとされます。当館に寄贈された瓦には、朝鮮半島や近畿地方を中心とした古代寺院出土と伝わるものがあります。このたびの展示では、2期にわたって古瓦を中心とした柳田コレクションをご紹介します。	8/25(火) 宇宙に響く御仏の声 朝鮮半島で10世紀から14世紀に栄えた高麗王朝。日本とも中国とも異なる独自の仏教が花開き、篤い信仰心に支えられた美しい経典や絵画が生み出されました。神戸市内に伝来する類稀な遺品を通して高麗王朝の美と信仰をご覧ください。	9/23(水・祝)
	4/6～24・27	5/7・11・18・25	6/1・8・15～30	7/1～10・13・21・27	8/3・10・17・24・31	9/7・14・24～30

【休館日】

今後の展覧会

【特別展】
トーベと
ムーミン展
～とおきの
ものを探しに～

トーベとムーミン展 キービジュアル
©Moomin Characters™

2026年10月10日(土)～12月13日(日)

「ムーミン」の生みの親で、絵画、風刺画、漫画、絵本、小説など多方面に才能を発揮したアーティスト、トーベ・ヤンソン(1914-2001)。2025年の「ムーミン」小説第1作出版80周年を記念する本展では、フィンランドのヘルシンキ市立美術館(HAM)の協力のもと、初期の油彩画や第二次世界大戦前後の風刺画、「ムーミン」小説・コミックスの原画やスケッチ、愛用品など約300点を通して、トーベの創作の世界を振り返ります。また、彼女の人生が色濃く反映された「ムーミン」シリーズの魅力にも迫ります。

【特別展】
大ゴッホ展
アルルの
跳ね橋

「アルルの跳ね橋(ラングロフ橋)」
1888年3月、油彩/カンヴァス、54×64cm
クレラー=ミュラー美術館
©Collection Kröller-Müller Museum, Otterlo, the Netherlands.
Photography by Rik Klein Gotink

2027年2月6日(土)～5月30日(日)

オランダを代表する画家の一人、フィンセント・ファン・ゴッホ(1853-90)。クレラー=ミュラー美術館が所蔵するコレクションから彼の画業を辿る本展第1期「夜のカフェテラス」(2025年開催)では、初期のオランダ時代からアルルに至る画業前半を紹介しました。第2期となる今回は、約70年ぶりの来日となる「アルルの跳ね橋」や、代表作「夜のプロヴァンスの田舎道」などをご紹介。アルルから晩年までの画業後半に迫ります。多くの困難にもくじけことなく、絵に向き合い続けたファン・ゴッホの情熱が込められた名品をぜひ会場でご覧ください。

神戸市立博物館

〒650-0034 神戸市中央区京町24番地
TEL.078-391-0035 FAX.078-392-7054
https://www.kobecitymuseum.jp/

利用案内
開館時間:午前9時30分～午後5時30分
※金、土曜日は午後8時まで開館
(2F、3Fの展示室への入場は閉館の30分前まで)
休館日:毎週月曜日(ただし、月曜日が祝日または休日の場合は開館し、翌平日に休館)
※年末年始のほか、整備休館など臨時に休館及び開館することがあります。詳細はホームページか、博物館までお問い合わせください。高校生以下は観覧料無料です。

アクセス
■JR「三ノ宮」、阪急・阪神「神戸三宮」、ポートライナー・地下鉄(西神・山手線)「三宮」から南西へ徒歩約10分
■新幹線「新神戸」から神戸市営地下鉄(西神・山手線)で「三宮」下車
■神戸空港からポートライナーで約18分、「三宮」下車
■JR、阪神「元町」から南東へ徒歩約10分
■地下鉄(海岸線)「旧居留地・大丸前」から南東へ徒歩約8分

神戸市立博物館公式ホームページ

神戸市立博物館は、昭和10年(1935)に建築された旧横浜正金銀行神戸支店を増改築し、昭和57年に開館しました。御影石の外装を施した古典主義様式の建物で、平成10年(1998)に国の登録有形文化財(建造物)になりました。

神戸の歴史展示

神戸の村と古文書Ⅲ 摂津国八郡郡花熊村

神戸で出会う、豊臣一族

蒐集の世界～柳田義一コレクション～

宇宙に響く御仏の声

地獄太夫と一休(部分)

びいどろを愛でる—弦朝顔ガラス盃の楽しみ方

本誌を手にとって読まれている頃には桜が見頃となっているのでしょうか。桜を愛でながら、「ちよっと一杯」とお酒を酌み交わす人たちもいらっしゃるかもしれません。江戸時代のガラス器—びいどろ、ぎやまんを眺めてみると、愛らしい盃、カットの輝きがうつくしい切子脚付杯など、さまざまな酒器がつくられており、宴席の場に彩を添えていたことが想像できます。酒器の中でも、ラッパ状に外へ開いた口縁を持ち杯の下部から、くるくると弦のように管が伸びた弦朝顔ガラス盃(図1)が目を惹きます。



図1 弦朝顔ガラス盃
江戸時代中期(1772-1844)
当館蔵(びいどろ史料庫コレクション)

これは注がれたお酒を飲み干すまで、下に置くことができないう可盃(「べくはい」、「べくさかずき」などと呼びます)の一つです。享保16年(1731)刊行の狂歌集『雅筵酔狂集』冬巻の「水仙花 可盃」(10丁裏、11丁表)には、「可」という字は、他の字の下に置かれることがないことから、このように名称が付されたといえます。¹⁾

当館は弦朝顔ガラス杯を8点所蔵していますが、その形は全く同じとはいえず、弦の部分が輪を結んでいないもの、縁に襷を設けたものなど様々です。²⁾ 弦朝顔ガラス盃については、寛政12年(1800)刊行にされた廣川辨「長崎聞見録」に「弦朝顔の盃」として挿入図で紹介されていることが指摘されていました。³⁾ 同書には「此盃ハ硝子にて作る。酒和らぎて飲よき物也、長崎硝子細工屋にあり」と解説も添えられ、長崎でつくられたガラス器、かつ酒を飲むための器であったことがわかります。ちなみに、「朝顔」は、ラッパ状に外へ開いた杯の形状のことをそのように呼んでいたようです。長崎貿易に携わった商家・村上家の文書

群に含まれる見帳(長崎貿易でもたらされた商品のリスト、落札者、落札価格などを記したものをみると、例えば「五番同(筆者註:臺こつぶ)」には「朝かほ丸臺小振也」、「六番同(筆者註:臺こつぶ)」には「朝かほ形風也」(図2)などと特徴が捉えられています。商品名の隣に描かれたスケッチは、どのようなガラス器がオランダを通じて輸入されていたのかを視覚的に伝えてくれる点で貴重です。加えて、隣に記されたメモ書きを読み解くことで、その特徴と、当時の人々がどのように呼んでいたのかを知ることができるのです。

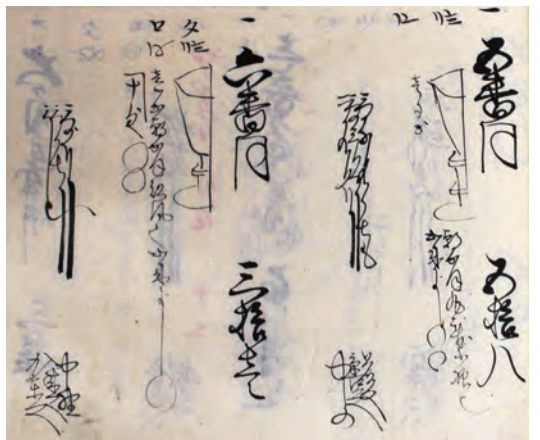


図2 嘉永二年西八月四番割同五番割 紅毛本方品代荷物箱荷物見帳
嘉永2年(1849)
当館蔵(池長孟コレクション)

さて、弦朝顔ガラス盃について話題を戻します。過日、ある和ガラスのコレクターの方から「弦朝顔盃を使ってお酒を飲んでみました」とのメールを受信。動画を拝見すると、ご自身が所蔵される弦朝顔盃でお酒を飲まれている様が収録されていました。この動画を拝見していると、お酒が杯から管を通り過ぎるあたりで、「ズルンッ」と音がることに気づきました。くるくると伸びる管を通す必要があるため、「吸い口から勢いよく吸わなければ、飲み干すことができないのか…」などと感想を持ちつつ、何よりもこの「音」がおもしろいと思い、動画を繰り返し見てしまいました。

その後、文献資料を調べていたところ、盛岡藩領大畑村の村林源助(1747-1821、号・鬼工)が記した「原始謾筆風土年表」に、興味深い記述がありました。⁴⁾

此頃、長崎より將來有しハ硝子にて細長き壺を横さまに二捻返したるか酒を飲干際に吐香の如の音を出せり。此音を鳴さずには飲干人は拳の勝とそ。容易にハ音無吸事能はさる也。茲謾壺と称せり。⁵⁾
(意訳:最近、長崎より伝わったガラス製の細長い杯の横に二つの振じりを加えたものでお酒を飲み干す際、「吐香」という音が出る。この音を鳴らさずに飲み干せば、酒宴の拳遊びで勝つことができるという。容易に音を出さずに吸うことはできない。茲謾(筆者註:弦朝顔)壺という名前である。)

同書の記述を読む限り、弦朝顔ガラス盃は宴席の場で行われる拳遊びで用いられ、飲み干す際の「音」が勝敗を決めていたことがわかります。拳遊びとは、中国から伝わったとされる酒宴で行われる手遊びです(ジャンケンも拳遊びの一つとされます)。手や指を使って簡単な勝負をし、負ければ罰としてお酒を飲む、といったものです。当時の拳遊びを紹介した文化5年(1808)序文『拳會角力圖會』下巻では、10~20人程でする「太平拳」、木製のコップに括り付けた球を使って遊ぶ「ヒ玉拳」、指ではなく声で数字を発する「盲人拳」などの拳遊びが紹介されています。残念ながら同書には弦朝顔盃に関する記述はありませんが、様々な拳遊びが派生する中で、弦朝顔盃を使用する拳遊びが生まれたのかもしれない。弦朝顔盃に注がれた酒をそろり、そろりと飲み干そうとする人。それをじっと見守る酒宴の同席者。静謐な空間で「吐香」と音が鳴った時の盛況ぶり…何とも愉快な情景が浮かんできます。

びいどろ、ぎやまんの作品に触れるにあたり、「どのような場で、どのように使われていたのか」と考えを巡らすようにしています。今日まで伝わるガラス器を当時の人々が愛でる様子を知りたいのです。もちろん、博物館資料となった弦朝顔盃で一杯なんてことはできません。このたびの気づきは、動画をお送りいただいた所蔵者様の和ガラスへの思い、興味関心の賜物といえます。先述した当館の8点の弦朝顔ガラス杯は、いずれも管の形状が異なります。それぞれどんな音を奏でたのか…興味関心は尽きません。

(中山 創太)

註

- 1) 作品解説「25.黄色ガラスべく杯」(関西大学博物館「受贈記念 横山滋ガラスコレクション びいどろ・ぎやまん・ガラス展—ガラス器を愛で愉しむ—」,2020年)、12頁を参照。なお、同書には「盃の底に細き穴をあけ指を以て其穴をふさぎて酒を盛しむ、仍て飲盡さねば下に置れぬ也」とあり、本稿で紹介するガラス製の可盃とは形状が異なります。引用文の底本は東北大学附属図書館蔵(狩野文庫)。東北大学総合知デジタルアーカイブ(<https://touda.tohoku.ac.jp/portal/>)を参照(2025年12月9日閲覧)。
- 2) 棚橋淳二「弦朝顔の盃」(「江戸明治時代のガラス雑報雑攷」(5)「GLASS」No.56、日本ガラス工芸学会、2012年)、39-45頁に詳しく紹介されています。
- 3) 中塚美智子「日本における吹きガラスの起源」(びいどろ史料庫、1985年)、21頁。なお、引用文の底本は当館蔵(池長孟コレクション)。
- 4) 古田良一「原始謾筆風土年表について」(村林源助『原始謾筆風土年表 下』みちの叢書第7巻、国書刊行会、1982年)を参照。古田氏によると、本資料の写本原本は村林家が所蔵するといえます。その他、写本の一部が国立公文書館に所蔵。村林源助は陸奥国下北郡大畑(現青森県むつ市)で呉服の販売に携わったといえます。「原始謾筆風土年表」は、自身の見聞きをまとめた全52巻(うち1巻と4巻は欠巻)からなり、寛永5年(1628)から文政元年(1818)の記事を収載。古田氏は源助の生前の記事は史料価値がないとしながらも、「著者の見聞きにかかることは興味も多く、また参考」になり、「近世末期の史料として役立つこともある」と評しています。
- 5) 村林源助「原始謾筆風土年表 下」、136-137頁より引用。なお、引用文には句読点を適宜補いました。

付記:本稿をなすにあたり、ご協力、掲載のご許可賜りましたジュエリーOGAWA・小川龍平様に心より感謝申し上げます。

「学芸員のノートから」びいどろを愛でる—弦朝顔ガラス盃の楽しみ方

河鍋 曉斎の世界

[特別展]

2026年7月11日(土)~9月23日(水・祝)

前期:7月11日(土)~8月16日(日)
後期:8月18日(火)~9月23日(水・祝)

※会期中、一部の作品は展示替えを行います。



地獄太夫と一休 明治4~22年(1871-89) 絹本着彩 137.1 x 69.3cm (通期展示)
© Photo: Ken Adlard



動物の曲芸 明治4~22年(1871-89) 紙本着彩 37.6 x 52.9cm (通期展示)
© Photo: Ken Adlard

※すべて作者は河鍋曉斎、所蔵はイスラエル・ゴールドマン・コレクション

コレクションが開く神戸の魅力

2026年4月25日(土)~6月14日(日)

山と海、豊かな自然と都市が共存し、瀬戸内の陽光が降りそそぐ街・神戸。古からの良港を有し、都にもほど近いこの地は、永い歴史と尽きせぬ魅力を有しています。

本展では、神戸市立博物館が誇る100件のコレクションを導き手に、咲き誇る花々を愛でるように、多様な視点より神戸の魅力を感じていただきます!

新たな出会いが始まる春4月、古き/新たな神戸と出会いに是非お越しください!

I 神戸と海と…!

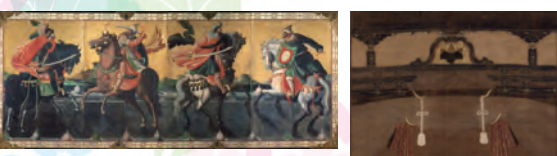
幕末の開港によって海外の文化が流入し異文化が共生する街となった神戸。しかし、神戸市を形成する地域は広く、開港以前からの永い歴史の中で醸成された実に多様な魅力をかかえています。展覧会の冒頭では、時代とともに変貌をとげてきた神戸の姿をご紹介します。

II 神戸と人々/人々の神戸

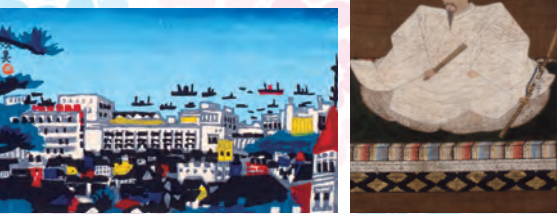
神戸の地には1万年以上前から人々が暮らし、時々に歴史を刻んできました。今年、話題の豊臣秀吉もその一人。本章では、神戸と深くかかわった歴史上の人物に焦点をあてて神戸の魅力を引き彫ります。

III 神戸の伝説・伝承

近代以降の異国情緒あふれるまちというイメージが強い神戸ですが、実は、多くの伝説・伝承も息づいています。一人の女性を奪い合う男性の物語、美しい都の貴公子と村長の娘の悲恋、地獄の王・閻魔との交流の物語…。神戸の地に生きた人々の想像/創造力が生み出した虚実の垣根を超えた物語をお楽しみください。



重要文化財 泰西王侯騎馬圖
江戸時代、17世紀初期
当館蔵(池長孟コレクション)



神戸百景 みなと館蔵 川西 英
昭和8~11年(1933-36) 当館蔵

IV 神戸ブランド

洋菓子・洋食、ファッション、日本酒、造船、鉄鋼…。神戸には、多くの人を魅了するアイテムがあります。本章では、神戸が育んできた価値ある品々をご紹介します。今は失われた? 「神戸ブランド」にも光をあてます。

V 神戸の磁気/引き寄せ・集う

六甲山、ハーバーランド、北野異人館街、南京町に有馬温泉。いまも多くの観光客を魅了する神戸。その魅力は神戸の歴史の中で培われたものです。今なお人々を惹きつける神戸のルーツとこれからの探ります。

VI 神戸万華—それぞれの神戸

最後の章はご来場のみなさまが主役。オススメの神戸について発信いただくコーナーを設けています。とっておきの神戸を発信してください!



兵庫県指定重要有形文化財
銅製経箱
鎌倉時代、13世紀
出有馬温泉観光協会蔵、
神戸市文化財課蔵、当館保管



神戸海軍操練所破風 文久3~元治2年(1863-65)頃 当館蔵

「特別展」ゴールドマン・コレクション 河鍋 曉斎の世界 / 「特別展」神戸百華—コレクションが開く神戸の魅力